

表1 火災発生状況

平成30年	帯広市	全国
総出火件数	33件	3万7900件
住宅火災	16件	1万912件
総死者数	1人	1422人
住宅火災による死者数	1人	1001人

表2 帯広市の住宅火災被害状況

平成30年	設置あり	設置なし
死者	なし	1人
焼損床面積	120㎡	183㎡
損害額	1064万9000円	1242万1000円

住宅火災における市の平成30年の被害状況は、住宅用火災警報器を設置している場合は、死者は出ておらず、設置していない場合に比べ焼損床面積は約3割、損害額は約1:5割程度低くなり、大きな効果があるといえます。(表2)

住宅用火災警報器は、煙や熱を感知し、火災が発生したことを知らせる警報器です。

住宅用火災警報器の効果

帯広市においても、同年中の総出火件数の約5割が住宅火災で、火災による唯一の死者1人も、住宅火災によるものでした。(表1)

火災死者の約7割は住宅で発生

平成30年中の全国における住宅火災の件数は総出火件数の約3割ですが、住宅火災による死者数は総死者数の約7割を占めています。

問い合わせ

住宅用火災警報器は、住宅内で起きた火災をいち早く感知し、知らせることで、火災の被害を最小限に抑えてくれます。

とかち広域消防局予防課(消防庁舎3階、☎26・9124)

住宅用火災警報器 交換のすすめ
10年たったら、とりかえろ。



いのちを守る
住宅用火災警報器

住宅防火の切り札

住宅用火災警報器の設置状況

今年全国で実施した住宅用火災警報器の設置状況調査によると、十勝は全国・全道平均より設置率が低いことがわかりました。(表3)

現在、住宅に設置していない場合は、早急に設置し、すでに設置している場合は正常に機能するか定期的に点検しましょう。

表3 全国の設置率(令和元年6月1日時点)

全国	82.3%
北海道	82.0%
十勝	73.0%

住宅用火災警報器によって火災を未然に防げた事例

事例1

居住者がストーブの上にプラスチック製の卓上ほうきを置き忘れ、別室で過ごしていたところ、住宅用火災警報器の警報音が鳴った。ストーブを見ると、卓上ほうきから煙が出ていたのでストーブのスイッチを切り、卓上ほうきに水をかけ出火に至らなかった。(道内)

事例2

居住者が、台所のIHクッキングヒーターでソバをゆでたまま入浴。鍋の中のゆで汁が蒸発し、ソバが焦げたことにより煙が発生。台所に設置した住宅用火災警報器(煙式)が感知したことにより警報音が鳴り、2階の同居者が気付いたことで、IHクッキングヒーターのスイッチを切ることができ火災には至らなかった。(道内)

無くそう！住宅火災

住宅火災の主な原因は、たばこ、ストーブ、こんろです。これらの火災を起ささないために「三つの習慣・四つの対策」を心掛けましょう。

住宅防火

いのちを守る 三つの習慣・四つの対策

習慣1 寝たばこは絶対しない

習慣2 ストーブは、燃えやすいものから離れた位置で使用する

習慣3 ガスこんろなどのそばを離れるときは必ず火を消す

対策1 逃げ遅れを防ぐために、住宅用火災警報器を設置する

対策2 寝具、衣類およびカーテンからの火災を防ぐために、防炎品を使用する

対策3 火災を小さいうちに消すために、住宅用消火器などを設置する

対策4 お年寄りや体の不自由な人を守るために、隣近所の協力体制をつくる

海に向かって突き出ている岬、青い空、真っ白な雪を頂く山脈、緑や黄、茶色が織りなすパッチワーク。こんな風景をどこかで見たことありませんか。羽田空港を出発し、帯広に近づく飛行機から見える風景です。出張が多い仕事をしていた時、世界中の国を訪れましたが、ヨーロッパの空から見たアルプスの絶景と同じくらい、美しいと感じています。

「とかち帯広空港」は昭和56年に開港し、多くの人に利用されていますが、空港を安全に維持していくためには、空港運営や滑走路の整備などに、年間約4億円の費用が必要です。令和3年に予定されている民間委託では、最終的に2グループから提案を受けることができ、30年間の委託で約77億円の経費が圧縮されることになりました。安全・安心で快適に利用できる空

市長コラム

夢かなうまち
おびひろ

行きたくなるまち

帯広市長 米沢 則寿



港運営につながっていくものと期待しています。

空港の民間委託は全国で進められ、仙台空港は鉄道事業を主力としている企業が中心に運営されています。空港と縁がない会社に見えますが、東京から新幹線で約1時間半の仙台に、オリンピック期間の宿泊需要の高まりを見込んだことや、自社のバスを活用して空港と東北各地との二次交通網を新たにつくることも考えた上で、運営に参入したと伺い、民間ならではの発想と機動力に大変驚きました。

交通ネットワークは、まちの可能性を広げ活力の向上につながる重要なインフラですが、新幹線の駅を誘致しても、それだけでは人が降りず、まちの活性化につながっていないという話も耳にします。一方で、世界遺産のマチュピチュのように、移動に時間がかかる不便な場所でも、多くの人が訪れるところもあります。

駅や空港の整備と同時に考えなければいけないことは「行ってみたい」「そこに行かないと始まらない」と思われるまちをつくることではないでしょうか。空港の民間委託を通して、私たちが気付かない帯広の特性を活かしたさまざまな提案があり、この地域の価値や可能性を改めて感じたところで、十勝・帯広には、食や農に関するビジネスの広がり、日高山脈襟裳国定公園の国立公園化に向けた動きなど、空港の利用促進につながるチャンスが潜在しています。

みんな力で力を合わせて活力あるまちをつくり、一括委託される7空港の中で、最も魅力的で成長率一位の空港にしたいと思っています。